

子宮頸部細胞診運用の実際 第2版 ベセスダシステム 2014 準拠

坂本穆彦(編)

坂本穆彦, 今野 良, 小松京子, 大塚重則, 古田則行(執筆)

東海大付属病院・病理検査技術科長/細胞検査士会会長

伊藤 仁

現場で有用なベセスダシステム 2014 手引書

坂本穆彦先生編集の『子宮頸部細胞診運用の実際—ベセスダシステム 2014 準拠』の第2版が発刊された。執筆は坂本先生をはじめとし、今野良先生、小松京子氏、大塚重則氏、古田則行氏ら細胞診の第一線で活躍するエキスパートである。

本書は「Ⅰ. ベセスダシステムの成り立ちとその要点および運用」「Ⅱ. 判定の実際」「Ⅲ. 報告書作成の実際」から構成されている。紙面を多く割いているのは「Ⅱ. 判定の実際」であり、ベセスダシステムの項目に合わせて「A. 標本の適・不適の評価」「B. 陰性」「C. 扁平上皮細胞異常」「D. 腺細胞異常」「E. その他の上皮性腫瘍および神経内分泌腫瘍」「F. その他の所見」について多くの写真と詳しい記述が示されている。また、それぞれがさらに小項目に分けられ、代表的な細胞像の所見を箇条書きでリストアップされている。重要なポイントや注意点などは“memo”として適所にわかりやすくまとめられている。また、ASCやAGCなどしばしば遭遇する実際の運用上の問題点などについても、要所要所で丁寧に説明されている。例えば、「ASC-Hは、傍基底型の異型扁平上皮細胞に対して用いられる傾向にある。しかし、萎縮像に対する明確な取り決めがない。現実的には萎縮像における異型扁平上皮細胞が腫瘍による細胞変化なのか、炎症など非腫瘍性の細胞変化なのかを判断することは難しく、非腫瘍性の細胞変化もASC-Hとして評価しなければならない場合もある」(p.90)など、まさに実践向

けの手引き書であるといえる。また、日米の判定基準の差についても、米国のCIS判定基準の一つである、「合胞性に出現する細胞像は、わが国でいうところの『異型未熟扁平上皮化生』『異型予備細胞増殖』の像と重複しているところがある」(p.104)など、わが国の細胞診の視点から解説されており、ベセスダシステム 2014 の理解を深めるために役立つであろう。

本書では本邦でも近年普及しつつある液状化検体細胞診に関して、いくつかの代表的な方法を取り上げ、その原理や方法についてシェーマ入りで紹介されている。細胞の見方・評価は、従来法と多少異なることがあるため、両者を比較し、丁寧にわかりやすく解説されている。

本書は既に細胞診に従事している熟練した細胞検査士や細胞診専門医はもとより、これから細胞検査士資格、細胞診専門医資格をめざす諸氏にも、ベセスダシステム 2014 を理解するためのわかりやすい書としてお薦めしたい“一冊”であり、子宮頸部細胞診の実際の現場に必携したい顕微鏡の傍らに置きたい“一冊”でもある。



●B5/頁232/2017 年
定価:本体8,000 円+税
[ISBN978-4-260-03237-7]
医学書院 刊